

## 高校生にみる不登校傾向に関する研究：意識調査を通して

著者	山下 みどり, 清原 浩
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	14
ページ	21-38
別言語のタイトル	A Study on School-refusal in High School Students
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/2502">http://hdl.handle.net/10232/2502</a>

# 高校生にみる不登校傾向に関する研究

— 意識調査を通して —

山下 みどり [鹿児島県立錦江湾高等学校]・清原 浩 [鹿児島大学教育学部(障害児教育)]

## A Study on School-refusal in High School Students

YAMASHITA Midori・KIYOHARA Hiroshi

キーワード：不登校，登校回避感情，私事化，ソーシャル・ボンド，意識調査

### 〇はじめに

不登校・登校拒否は今日世間一般に知られ認められてきている。1992年、文部省は「不登校はだれにでもおこりうる」と報告し、不登校が「特定の子どもの特有の問題」とする従来の見方を大きく転換させた。学校現場では対人関係で不登校、保健室・相談室登校になる生徒が増えてきている。友だちに会うのがこわいなどの理由が多い。また、さまざまな症状を持ちながらも、学校へ通っている生徒もいる。そういう現代の生徒の意識について調査・研究をし、学校の対応の仕方や本人・保護者への援助・支援のよりよいあり方を見だし、今後の生徒指導等へ生かしたい。

### I 問題

平成15年度学校基本調査速報<sup>注1</sup>によると、平成14年度間の長期欠席者のうち「不登校」を理由とする児童生徒数は13万1千人で初めて減少（8千人減少）した。昭和41年度に登校拒否統計をとりはじめてから初めての減少である。これらの調査で示される数字は、毎年の不登校の実態を伝えるものであるが、必ずしも全体像とは重ならない部分もあると考えられる。例えば、年間30日未満の欠席者は不登校の子どもとは別の存在なのか、つまり統計上の基準のとり方によって現実が切り捨てられる点である。また、高校生で不登校になっている生徒についても中退との重なりあいから十分に把握されていない。

本論文では、できるかぎり現実が切り捨てられる部分、または統計上からでは見えにくい部分（暗数）を少なくし、不登校現象の全体の傾向をつかむことを目的とし、対象高等学校全生徒へ意

識調査を行なった。

仮説1：「生徒が変わった」「以前と違う」とよく言われるが本当に違うのだろうか。違うとすれば何が違ってきているのか。その変化を生徒のプライベート化（私事化）の進行によるものと筆者は考える。

仮説2：登校回避感情を持ちながらも、不登校に陥らずに学校に登校するグレイゾーンの生徒がたくさんいると思われる。それらの生徒を学校社会につなぎとめているもの（ボンド）がある。社会的絆（ソーシャル・ボンド）が働いているため、生徒は不登校に陥らないと筆者は考える。

### II 方法

(1) 調査対象：全日制高等学校全学年1026人  
2003年7月

(2) 調査内容および調査方法：森田<sup>注2</sup>が用いた生徒調査（1989年）を利用

質問紙を用い、生徒に全員に約50分の時間をとって実施した。生徒のプライバシーに十分配慮するよう留意した。

### III 結果と考察

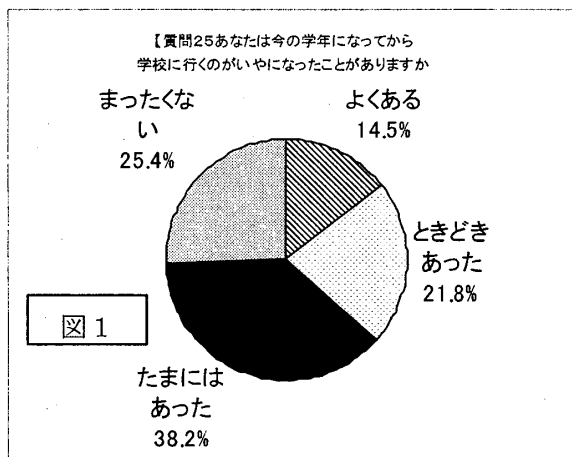
調査の結果、特に重要だと思われるもの5項目に絞って考察したい。

#### (1) 登校回避感情

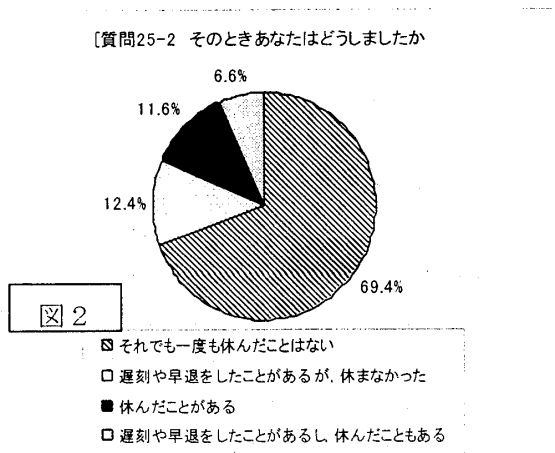
学校へいくのがいやになったことがあるという「登校回避」の感情経験（質問25）をもっている生徒をまず拾い出し、次に「登校回避」の感情を抱いたとき、どのような「出欠行動」（質問25-2）として感情が具体化されたのかという二段階の設問を組み合わせることにより5つの群に分類す

る。

質問25の結果は、図1のとおりである。質問25で、「まったくない」と答えた生徒は登校回避感情がまったくない生徒である。「登校回避感情がない出席生徒」と分類する。「よくある」、「ときどきあった」、「たまにはあった」を選んだ生徒は、登校回避感情がある生徒である。74.6%もの多くの生徒が登校回避感情を持っていることがわかる。



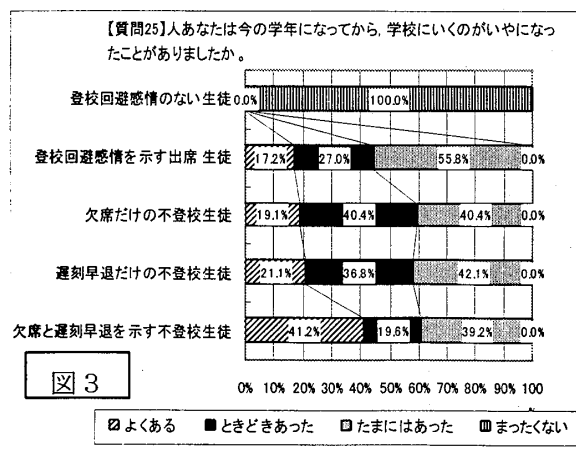
次に質問25-2と組み合わせる。①「それでも一度も休んだことはない」を選んだ生徒は69.4%で、「登校回避感情を示す出席生徒」と分類する。②「休んだことがある」生徒は11.6%で、「欠席だけの不登校生徒」と分類する。③「遅刻や早退をしたことがあるが休まなかった生徒」は12.4%で、「遅刻早退だけの不登校生徒」と分類する。④「遅刻や早退をしたことがあるし、休んだこともある生徒」は6.6%で、「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」と分類する。以上の4群から構成される。欠席行動は「年間30日以上」に限定し



ないことで、教師からは見えない、あるいは見えにくい不登校生徒や問題視されることの少ない不登校生徒を把握し、いまだ欠席に至っていない潜在的な不登校現象のグレイゾーンについても考察していく。

登校回避感情の頻度と不登校行動のタイプをクロス集計すると、統計的に有意な差があった ( $p < .01$ )。その後、「登校回避感情を示す出席生徒」と不登校群の3つのタイプについて残差分析を行った。「よくある」と登校回避感情の経験の頻度の高い生徒は「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」となりやすいことがわかる。図3に示す。

「よくある」という回答率が、「登校回避感情を示す出席生徒」では、17.2%であるのに対して、不登校行動の進んだ「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、41.2%となっている。この「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「よくある」という回答が「ときどきあった」、「たまにはあった」という回答より有意に多い。「欠席だけの不登校生徒」は「ときどきあった」が有意に多い。「遅刻早退だけの不登校生徒」→「欠席だけの不登校生徒」→「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」というように、不登校行動の進行と関係しているといえる。



「登校回避感情を示す出席生徒」は、今現在は我慢して登校しているが、これらの生徒には、登校回避感情の経験があり、不登校行動の進行と関係のある「よくあった (17.2%)」、「たまにはあった (27%)」と回答した生徒が約45%に達している。登校回避感情の経験頻度だけが不登校へ促進するのではないことがわかる。この登校回避

感情にさまざまな付加要因が加わって不登校が促進されたり、抑制されたりすると思われるが、不登校になる基盤には登校回避感情が伴っていることは確かである。不登校の全体像を考えていく場合、「登校回避感情を示す出席群」の生徒は「潜在的な不登校への可能性をもった群」としてみていく必要がある。

他の調査でも同様の傾向が出ている。『NHK中学生・高校生の生活と意識調査（2002年）』によれば、「学校に行く気がしない」と思うことを聞いた結果は、「まったくない」はほぼ横ばいであるが、「よくある」が中学生で82年の3%から5%へ高校生が6%から10%へ増加した。高校生では「ときどきある」「たまにある」を合わせると55%以上である。

## (2) 不登校の理由

「登校回避感情」、「不登校行動」のきっかけとなった理由について考察する。表1は「学校へいくのがいやになった」ときの理由とそのとき欠席したり早退・遅刻したりした生徒の理由を示したものである（質問25-1）。

登校回避感情を示す出席生徒（A欄）の理由の中で最も多いのは、「ねむい、体がだるい」という身体反応によるものである（84.6%）。また、この理由は、登校回避感情のみられる生徒の中から不登校生徒だけを取り出した結果（B欄）についても同じである（84.7%）。

本調査では、登校回避感情を示す出席生徒及び不登校生徒の8割以上が身体的な反応としての倦怠感、脱力感を訴えている。

森田の調査では、登校回避感情を示す生徒（A欄）の理由の中で最も多いのは、「ねむい、体がだるい」という身体反応によるものが69.3%であり、登校回避感情のみられる生徒の中から不登校生徒だけを取り出した結果（B欄）についても同じで73.4%である。不登校生徒に関しては、森田の調査では本調査の2倍以上の数値を示している。森田の調査時期の不登校問題が、一部のマスコミで宣伝するような学校のあり方や現代の教育制度への否定的価値観ないしは反発感情を積極的に主張する行動ではないことを示している。しか

も、この理由をこれほど多くの不登校生徒が訴えているということは、その他のさまざまな不登校の欠席理由がすべてこの身体的な倦怠感・脱力感と重複しつつ現れていることを意味していると森田は述べている。

複数選択のため総計は100%を超える		反応率		行動化率	
		学校へいくのがいやになった理由 (A)	不登校生徒の理由 (B)	不登校生徒の比率 (B/A)	
友人関係	1	友だちとうまくいかない	118 15.4%	33 14.0%	28.0%
	4	友だちにいじめられる	10 1.3%	4 1.7%	40.0%
	16	精神的にショックなことがあった	68 8.9%	23 9.8%	33.8%
	7	学校がこわい・不安だ	32 4.2%	12 5.1%	37.5%
	8	学校でだれもかまってくれない	12 1.6%	3 1.3%	25.0%
	9	人と話すのがいやだ	37 4.8%	11 4.7%	29.7%
対教師関係	2	先生とうまくいかない	44 5.8%	24 10.2%	54.5%
	3	先生がひどくしかる	51 6.7%	18 7.7%	35.3%
学習	5	勉強したくない	316 41.3%	102 43.4%	32.3%
	6	授業がわからない	190 24.8%	63 26.8%	33.2%
身体的	10	ねむい・体がだるい	647 84.6%	199 84.7%	30.8%
	11	朝になると学校にいけない	57 7.5%	33 14.0%	57.9%
	12	病気がち	36 4.7%	22 9.4%	61.1%
学校外誘因	13	家庭の事情	16 2.1%	8 3.4%	50.0%
	14	仲間から誘われた	6 0.8%	4 1.7%	66.7%
	15	学校外におもしろいことがある	66 8.6%	29 12.3%	43.9%
	17	親と離れたくない	4 0.5%	1 0.4%	25.0%
	18	その他	91 11.9%	31 13.2%	34.1%

表1

次に多い理由は、「勉強したくない」である。登校回避感情を示す出席生徒では41.3%，不登校生徒では43.4%の生徒が理由としてあげている。いずれも理由項目中第二位である。この項目は、学習意欲に関連する項目であり、今日の不登校現象の一つの主要形態である「無気力」とも関連している。

森田の調査でも順に登校回避感情を示す生徒では38.1%，不登校生徒では44.3%と同様である。

しかし、ここで「学習意欲の喪失」や「無気力」のことばの持つ意味に注意する必要がある。これらのことばを文字通りに解釈すると、不登校の原因が生徒本人の側に帰属するような印象を与えるが、現実には、学習を指導・援助する側とこれを受け止め、取り組む側との相互の関係にある。無気力タイプの不登校に対して、教師は、生徒を励ましたり、叱責したりすることに終始する指導法を用いがちであり、学習を指導・援助する側の問題への対応策が念頭におかれていないことがある。「勉強したくない」に準じるように、第三位の理由が現れている。

第三位の理由項目は、「授業がわからない」である。登校回避感情の理由としては24.8%，不登校生徒では26.8%の生徒が選んでいる。第二位の「勉強したくない」と密接にかかわる。授業でのつまづきが、学習意欲の低下につながると考える。教師は、指導にあたり、生徒の悩みやつまづいているところを十分に汲み取りつつ、学習指導・援助のあり方を含めた対応に心がけなければならない。

森田の調査では、登校回避感情を示す生徒では16.6%，不登校生徒では22.1%である。前者は第五位に、後者は同じく第三位に位置している。高等学校生徒と同様に、中学生の不登校生徒にとっては特に大きな問題であることを教師は注意しなければならない。

第四位の理由項目は、「友だちとうまくいかない」である。登校回避感情の理由としては15.4%，不登校生徒では14.0%の生徒が選んでいる。「うまくいかない」のなかには、さまざまな友人関係上の悩みがこめられている。その悩みの中には、友人との葛藤・対立だけでなく、関係性

がうまくとれないことへの悩みもあると考える。希薄になりつつある友人関係が現代の生徒たちの問題として指摘されているが、それは友人関係に無関心なのではなく離れてはいるが求めたいという相反する状態にあることを意味している（森田1991）。

また、本調査の不登校生徒では「朝になると学校にいけない」が同率四位である。不登校生徒は、第一位の「ねむい、体がだるい」という身体反応と同じ様子を示す。

続いて、「精神的にショックなことがあった」、「学校外におもしろいことがある（学校外誘因）」となる。

次に、登校回避感情から不登校行動へと移行する場合、どのような欠席理由のときに、不登校へと陥る生徒が多いのかについて考える。表1に登校回避感情をもった生徒（A）に占める不登校生徒（B）の比率（B/A）を算出した。ここでは、この比率を「行動化率」と呼ぶ。この比率を算出するのは、1つは、学校回避感情が不登校の基盤をなしているとしても、すべての生徒が不登校に陥るわけではなく、我慢して登校している生徒もいるからであり、どの理由が不登校へと行動させるのに強い要因となり、どの理由が弱い要因なのかを明らかにするためである。

不登校理由の中で、最も多くの生徒が選んでいた「ねむい・体がだるい」という項目の行動化率は30.8%と低位群に属している。行動化率が低いということは、回避感情を不登校行動へと移行させるにあたって強い要因でないことを意味している。

また、「勉強したくない」、「友だちとうまくいかない」、「精神的にショックなことがあった」など、登校回避感情の理由項目中高い反応率を示した項目の行動化率は、低位であり、「ねむい・体がだるい」という理由の行動化率と著しい違いを示していない。これに対して、友人関係項目群や学習項目群のなかで高い反応率を示しつつ比較的高い行動化率を示しているのが、「先生とうまくいかない」（54.5%）である。この傾向には十分注意する必要がある。

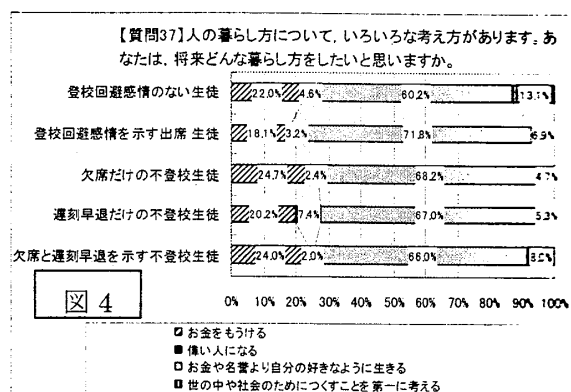
これに対して、反応率の低い項目には、行動化

率が高く現れている。「仲間から誘われた」という理由を挙げる生徒には、学校へいくのがいやになったという回避感情が行動化され、不登校に走る傾向がきわめて強くみられるといえる。学校外の要因による理由を挙げる生徒はあまり多くないものの、行動化率は高い傾向がみられる。

### (3) 将来の好ましいライフスタイル

質問37「人の暮らし方についていろいろな考え方があります。あなたは将来どんな暮らし方をしたいと思いますか。」の回答に第一次私事化過程の進行は代表される。

図4に結果を示す。χ<sup>2</sup> 検定の結果、人数の偏りは有意であった (p<.05)。そこで、残差分析を行った。「登校回避感情のない出席生徒」は、「お金や名誉より自分の好きなように生きる」が有意に少なく (p<.01), 「世の中や社会のためにつくすことを第一に考える」は有意に多い (p<.01)。「登校回避感情を示す出席生徒」は、「お金をもうける」が有意に少なく (p<.10), 「お金や名誉より自分の好きなように生きる」が有意に多い (p<.01)。「遅刻早退だけの不登校生徒」は、「偉い人になる」が有意に多い (p<.10)。



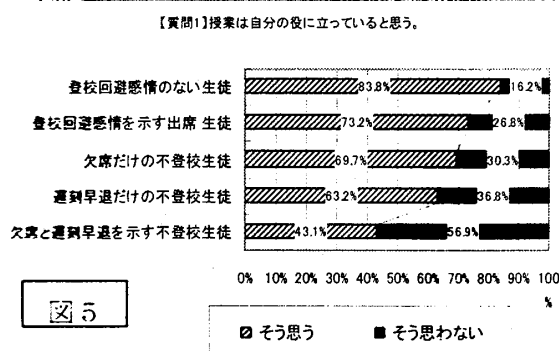
全体で見ると今の生徒たちは、「お金や名誉より自分の好きなように生きる」が、67.8%と飛びぬけて多く、次に「お金をもうける」が、20.2%であり、「世の中や社会のためにつくすことを第一に考える」は、わずか8.2%である。

この傾向は多くの青少年の意識調査結果に現れている傾向と同じである。自分自身の利益を犠牲にしてまで社会に貢献することはないと考え「趣味にあった暮らし・その日その日をのんびりと」

という私生活での意味充足を志向したライフスタイルへと関心を高めている青少年の意識を反映した結果になっている。

森田の調査でも同じ傾向が出ている。森田の調査よりも、今回の方がますますその傾向は強い。第一次私事化過程の進行である。

私事化とは、現代社会の主要な動向は「自分を犠牲にしてまで企業や集団に尽くすことはほどほどにし、私生活の隅々にまで丸ごと呑み込めることがないように人間関係や組織に対して適度な距離を置きつつ自分の私的な領域を確保したいという人々の欲求」に動かされている、そうした傾向のことである。学校社会の「第一次私事化」とは、「教育に対する人々の意味付与がもはや対社会的機能という公的価値によって基礎付けられることがない」ということで、国家有意の人材の育成といった視点の欠落ということである。しかし、それでも私的な欲求充足手段として学校はまだ意味を保持している。生徒の意識には、学校社会をとおして全体社会へと寄与するという考えは少ない。しかし、第一次私事化の段階ではまだ「よい成績→社会的地位の上昇→幸福な生活」という達成志向が説得力をもっている。生徒は「好きなように生きる」と回答しながらも、質問1 (図5) で「授業や学校は役に立っている」と回答している。「登校回避感情のない出席生徒」が多いが、「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」でさえ40%いる。



他の調査でも同様の傾向が出ている。『NHK中学生・高校生の生活と意識調査 (2002年)』によれば、「どのような生き方が望ましいか」の問いに、中高生は「その日その日を自由に楽しく過

「ぐす」や「身近な人たちと和やかな毎を送る」と答えた生徒が多い。合わせて約80%の生徒がいる。このような生き方は、将来のことよりも現在の感情を大事にする考え方である。これに対して「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」や「みんなと力を合わせて世の中をよくする」は少ない。未来を見据えて行動する未来志向の考え方は少数派になっている。NHKが1973年から16歳以上の国民を対象に5年に一度実施している「日本人の意識」調査でも、78年から98年の20年間に「自由に楽しく」は20%から25%へ増加、「しっかりと計画」は31%から26%に減少している。「しっかりと計画を立てて豊かな生活を築く」という生き方は、中高生だけでなく国民全体でも減少している。

また、他人に負けまいとがんばる「競争型」か「のんびり」と自分の人生を楽しむ「のんびり型」かの問いには、中高生ともに「のんびり型」が50%以上である。高校生は60%を越えている。この20年間で調査ごとに「競争型」が減少し、「のんびり型」が増加している。82年から92年までは「競争型」が「のんびり型」を上回っていたが2002年逆転した。「人は人、自分は自分」のマイペースな生き方を選ぶ者が増えている。

「自分の生活よりも社会のことを考えるか」、「社会の子どもを考えると自分の生活を大切に」の問いにも中高生は70%以上が「自分の生活を大切に」を選んでいる。「個人主義」の傾向が見られる。

#### (4) 成績と将来の幸せとの関係

質問34「あなたは、成績と将来の幸せとの関係について次のどの意見に近いですか」の回答に第二次私事化過程の進行は代表される。図6に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $p < .01$ )。そこで残差分析を行った。

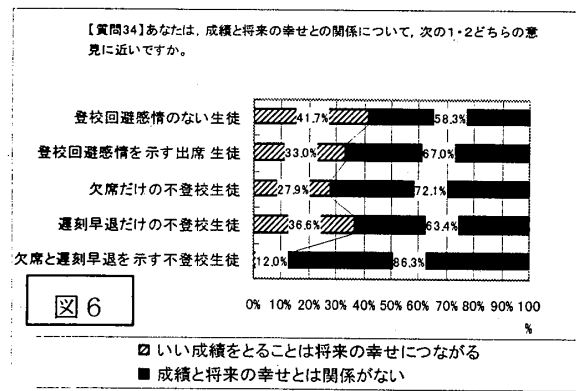
「登校回避感情のない出席生徒」は、「いい成績をとることは将来の幸せにつながる」が有意に多く ( $p < .01$ )、「成績と将来の幸せとは関係がない」は有意に少ない ( $p < .01$ )。これとまったく逆に「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「いい成績をとることは将来の幸せにつながる」が有

意に少なく ( $p < .01$ )、「成績と将来の幸せとは関係がない」は有意に多い ( $p < .01$ )。

「登校回避感情のない出席生徒」は、学校がまだ意味を持つと考えているものが多い。

全体でみると出席群と不登校群に差はあるが、学校での成績が将来の幸せを保証するものではないと考える生徒が65%を越えている。第二次私事化の段階は、「学校社会が献身に値する報酬性を生徒に与えることができなくなった」状態になる。「よい成績→社会性の向上→幸福な生活」という「人生のチェーン連鎖神話」が揺らいでいる。学校は求心力がなくなっている。

森田の調査では、「いい成績をとることは将来の幸せにつながる」は出席群で48.1%、不登校群で41.2%、全体で46.2%であった。「成績と将来の幸せとは関係がない」は出席群で51.9%、不登校群で58.8%、全体で53.6%と半数以上の生徒が回答している。本調査と傾向としては同じである。しかし、本調査では「成績と将来の幸せとは関係がない」は出席群で64.1%、不登校群で71.4%、全体で65.7%と森田の調査のときより大幅に増えている。ますます第二次私事化は進んできているといえる



また、他の調査でも同様の傾向が出ている。『NHK中学生・高校生の生活と意識調査』によれば、「一生懸命勉強すれば、将来よい暮らしができるようになる」の問いに、中学生は「そう思う」と約60%の生徒が答えている。しかし、1年2年3年と学年が上がるにつれて「そう思う」生徒は減少している。高校生になると「そう思う」と「そうは思わない」が拮抗している。

(5) ソーシャル・ボンド

学校に生徒を引きとめているものはソーシャル・ボンドである。

人々を結び付けているのは①アタッチメント：大切な人に抱く愛情や尊敬，②コミットメント：同調行動をとった場合の利害得失の判断，③インボルブメント：合法的な生活に使っている時間とエネルギー，④ビリーフ：法の威信に対する信念の4つの要素である。この要素が子どもたちを学校に結び付けていくが、私事化現象はこの要素が働くことを弱め子どもたちを登校へと誘うことを弱めている。

1) アタッチメント

質問14「友だち関係」，質問16「休み時間の過ごし方における友人関係」の問いから、アタッチメントのある生徒は不登校になりにくいといえる。

質問14「休み時間や放課後に、友だちと話をしたり遊んだりすることは楽しいことだと思いますか。」図7に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $p < .01$ )。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情のない出席生徒」は、「とても楽しい」「別に楽しいとか苦痛だとは感じない」が有意に多く ( $p < .05$ )，「少しは楽しいと思うことがある」は、有意に少ない ( $p < .01$ )。「登校回避感情を示す出席生徒」・「欠席だけの不登校生徒」は、「少しは楽しいと思うことがある」が有意に多い ( $p < .05$ )。「遅刻早退だけの不登校生徒」は、「少し苦痛に思うことがある」が有意に多い ( $p < .01$ )。「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「とても苦痛に思う」が有意に多い ( $p < .05$ )。

50)。どのタイプも、「とても楽しい」が65%を越えているが、十分楽しんでいる生徒ばかりではない。

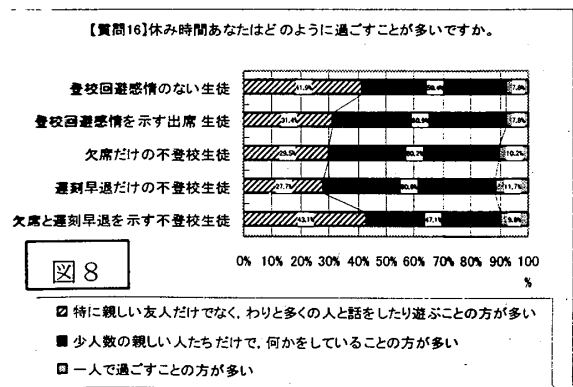
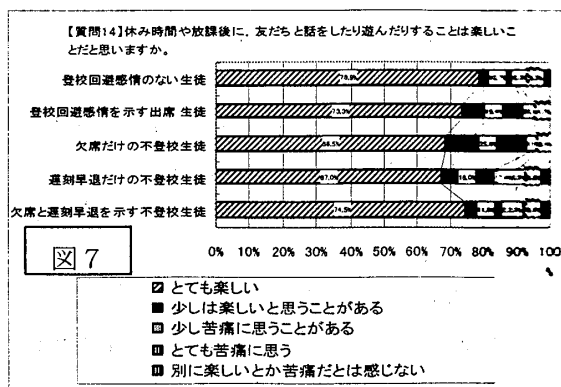
やはり、「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、友だちと過ごすことが苦痛である。友だちとの関係がうまく取れていないといえる。友だちとの関係がうまくいくと欠席・遅刻・早退も少しは減るのではないかと考える。

「登校回避感情を示す出席生徒」は、「とても楽しい」「少しは楽しいと思うことがある」が、90%を越えており、登校回避感情を持ちながらも不登校にならないのは友人との関係がよいからではないかと考えられる。

森田の調査では、「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」以外は「とても楽しい」が多い。高校で「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、授業以外では楽しいと感じていることがわかる。ソーシャル・ボンドのアタッチメントがここにはあるといえる。

質問16「休み時間あなたはどのように過ごすことが多いですか。」図8に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $.05 < p < .10$ )。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情のない出席生徒」は、「特に親しい友人だけでなく、わりと多くの人と話をしたり遊んだりすることが多い」が有意に多く ( $p < .01$ )，「少人数の親しい人たちだけで、何かをしていることの方が多い」が有意に少ない ( $p < .01$ )。逆に「登校回避感情を示す出席生徒」は、「特に親しい友人だけでなく、わりと多くの人と話をしたり遊んだりすることが多い」が有意に少なく ( $p < .10$ )，「少人数の親しい人たちだけで、何か





をしていることの方が多い」が有意に多い (p<.05)。不登校群の3つのタイプの生徒には、特に有意差は見られない。

登校回避感情のまったくない生徒は、多くの友人と過ごすことが多く、登校回避感情を示しながらも出席する生徒は、少人数で過ごすことが多い。親しい友人がいることで、不登校にならずにすんでいるのではないかと考えられる。これも対人関係のポンド=アタッチメントがあるかどうかで不登校になるかならないかに関わる。

森田の調査では、不登校のタイプ順に「多くの友人と過ごす」が減っている。全体的な傾向としては、「少人数で過ごす」が優勢であり、全体の60%を占めている。「多くの友人と」は40%弱である。私事化現象には、対人関係レベルでは、ごく親しい友人や家族との関係へと閉じこもる傾向が含まれているが、学級における子どもたちの世界でもこの傾向が優勢となってきた。

今回の調査でも、「少人数で過ごす」生徒は、「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」でも少なくとも50%弱であり、他は60%を越える。全体的な傾向としては、森田の調査と同様である。私事化現象がみられる。

## 2) コミットメント

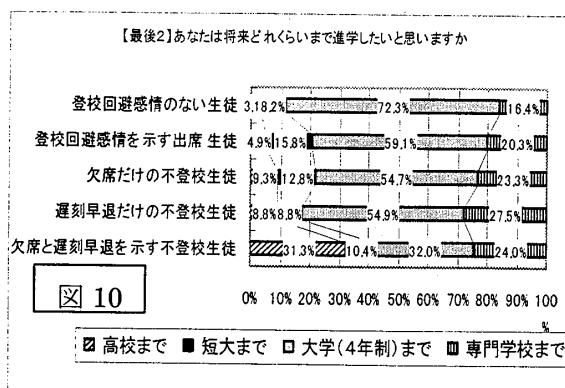
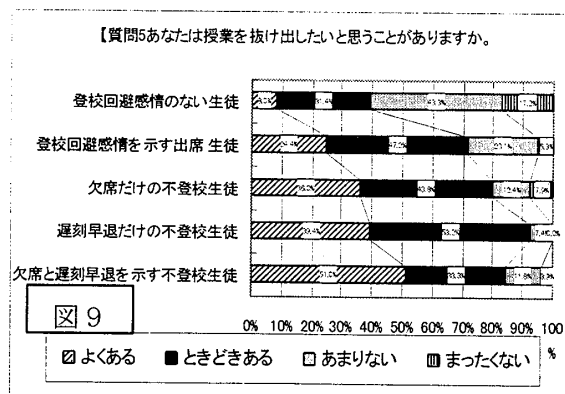
質問5で「授業を抜け出したい」(図9)と思う生徒は多いが、最後の質問の「将来どれくらいまで進学したいか」(図10)には「大学まで」と不登校群を含む各タイプの多くの生徒が答えている。不登校群の生徒が、進学という目標については強制であれ主体的であれ、自分の目標に組み込んでいることがわかる。模範的に制度化された目標行動にコミットメントを持っている。生徒が目標を持っていることやその達成に向けて行動していることに充足感をもっているかが重要になる。

質問5「あなたは授業を抜け出したいと思うことがありますか。」図9に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった (p<.01)。そこで、残差分析を行った。

「欠席だけの不登校生徒」・「遅刻早退だけの不登校生徒」・「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「よくある」と答えたものが有意に多い (p<.01)。逆に、「登校回避感情のない出席生徒」は

「よくある」・「ときどきある」が有意に少ない (p<.01)。「登校回避感情を示す出席生徒」は、「ときどきある」が有意に多い (p<.01)。

「登校回避感情のない出席生徒」は、授業は自分のためになっており(質問1)、社会に出てからも役立つ(質問2)と答えている生徒が多いことから、この結果は、順当な結果ともいえる。



「欠席だけの不登校生徒」・「遅刻早退だけの不登校生徒」・「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、80%以上が抜け出したいと答えており、授業に出ることが苦痛であり、授業は必要ではないと思っている。「遅刻早退だけの不登校生徒」は、他のタイプより突出して抜け出したいと答えている (90%以上)。遅刻・早退しながらも、いやいや授業に参加している。

自己実現へのポンド=現在の活動それ自体の中に充足価値を満足させるものがあるかどうかによってその活動へのつながりの強弱が左右されること=が、薄れているといえる。

森田の調査より、「そう思う」と回答したものは、今回の方が「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」を除き、2倍以上になっている。「欠席と遅

刻早退を示す不登校生徒」に関しては、約10%の増である。14年経っているということと、高校生であるということを加味しても、大幅な増加である。ますますソーシャル・ボンドが薄れてきているといえる。

### 3) インボルブメント

現在の活動それ自体の中に充足価値を満足させるものがあるかどうかによってその活動の場へのつながりの強弱が左右されることを意味している。質問5「授業を抜け出したい」(図9)、質問7「学校生活の繰り返しがいや」(図11)、質問13「学校行事はきゅうくつ(図12)」, 質問14「放課後・休み時間は苦痛」(図7), 質問22「部活は退部した」, 質問22-2「部活は苦痛」, 質問24「学級活動は苦痛」というように、出席群にもいるが不登校群の生徒はこの割合が一段と高い。部活動・学校行事や学級を楽しいと思う生徒はインボルブメントがあり、登校できる。

質問7「あなたは、毎日の同じような学校生活の繰り返しが、いやになることがありますか。」図11に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $p < .01$ )。そこで、残差分析を行った。

「欠席だけの不登校生徒」, 「遅刻早退だけの不登校生徒」, 「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「よくある」が有意に多い ( $p < .01$ )。「登校回避感情を示す出席生徒」は、「ときどきある」が有意に多い ( $p < .01$ )。逆に「登校回避感情のない出席生徒」は、「よくある」・「ときどきある」が有意に少ない ( $p < .01$ )。

「登校回避感情を示す出席生徒」, 「欠席だけの不登校生徒」, 「遅刻早退だけの不登校生徒」, 「欠

席と遅刻早退を示す不登校生徒」と登校回避感情を示す生徒はどのタイプも「よく・ときどきいやになることがある」が80%を越えている。これほど多くの生徒が「同じような学校生活の繰り返し」を苦痛に思っている。「登校回避感情を示す出席生徒」も、何かきっかけがあれば、不登校に転じる可能性は大いにある。

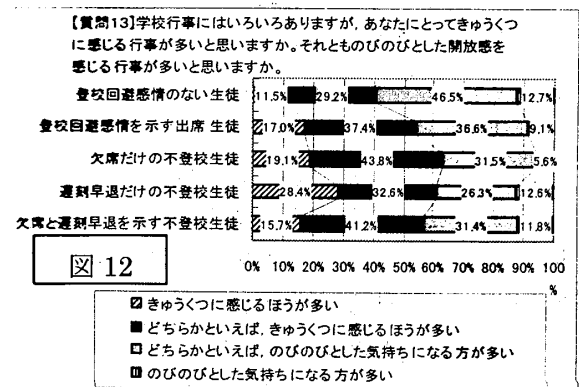
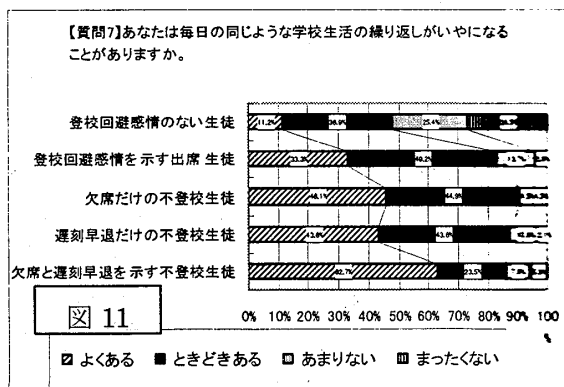
「登校回避感情のない出席生徒」は、学校生活を他のタイプよりは受け入れているが、それでも約50%である。

質問5と同様に、即時達成的自己実現へのボンド=現在の活動それ自体の中に充足価値を満足させるものがあるかどうかによってその活動へのつながりの強弱が左右されること=が、薄れているといえる。

森田の調査より、「登校回避感情のない出席生徒」・「登校回避感情を示す出席生徒」は、「よくある」の割合が2倍以上に増えており、不登校群の3タイプについても約15%の増である。どのタイプも大幅な増である。ますます即時達成的自己実現へのボンド=インボルブメントが薄れてきている。「同じような学校生活の繰り返し」を苦痛に思っている生徒がここまで増えてきている。学校生活に意味を見出していないといえる。

質問13「学校行事にはいろいろありますが、あなたにとってきゅうくつに感じる行事が多いと思いますか。それとものびのびとした開放感を感じる行事が多いと思いますか。」図12に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $p < .01$ )。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情のない出席生徒」は、「きゅうくつに感じるほうが多い」 ( $p < .01$ )、「どちらか



いえば、きゅうくつに感じるほうが多い」(p<.05)は有意に少なく、「どちらかといえば、のびのびとした気持ちになる方が多い」が有意に多い(p<.01)。逆に、「遅刻早退だけの不登校生徒」は、「きゅうくつに感じるほうが多い」が有意に多く(p<.01)、「どちらかといえば、のびのびとした気持ちになる方が多い」が有意に少ない(p<.05)。「欠席だけの不登校生徒」は、「どちらかといえば、きゅうくつに感じるほうが多い」が有意に多い(p<.10)。

「登校回避感情のない出席生徒」は、行事を他のタイプの生徒よりは、楽しんでいるといえる。

森田の調査では、「きゅうくつに感じるほうが多い」・「どちらかといえば、きゅうくつに感じるほうが多い」を合わせると、全体に本調査より割合が高い。前述したが、中学校より高校のほうが自分たちが中心となって参加するものが多いのでこの結果が出たのではないだろうか。

学校生活の中で、のびのびと自由にできるはずの行事がきゅうくつなものになると、ますます学校に来たくない生徒が増えるのではないかと。不登校傾向の生徒が増える一因になっているのではないかと考えられる。

質問22「あなたは、放課後の部活動にどの程度参加していますか。」図13に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった(.05<p<.10)。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情を示す出席生徒」は、「休まずに熱心にやっている」が有意に多い(p<.10)。

「欠席だけの不登校生徒」は、「休まずに熱心にやっている」が有意に少なく(p<.05)、「よく休むが続いている」が有意に多い(p<.05)。「遅刻早退だけの不登校生徒」は、「やっていたが退部した」が有意に多い(p<.10)。「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「休まずに熱心にやっている」は有意に少なく(p<.05)、「入部しているが出たことはない」が有意に多い(p<.10)。

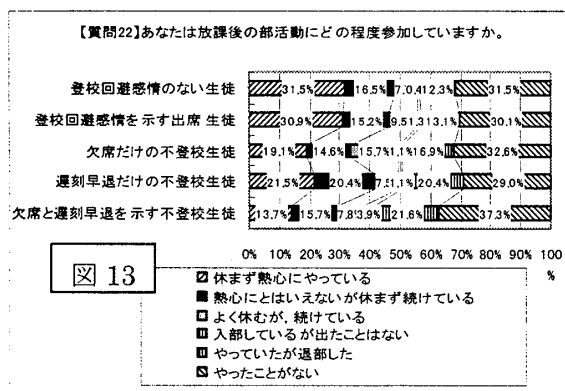
「登校回避感情を示す出席生徒」は、「休まずに熱心にやっている」ものが多い。登校回避感情を持ちながらも、休まずにやるということは、部活動が楽しく意味のあるものであることがわかる。「欠席だけの不登校生徒」は、欠席しながらも部

活動に参加しているといえる。部活動が、学校へのつながりになっているのではないかと。

「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、入部しながらも出たことはないことから、やはり欠席・遅刻・早退を繰り返すためといえる。しかし、入部しているということは、初めはやる気があったといえる。

全体的な傾向をみると、「休まず熱心にやっている」のは全校生徒の28.3%である。「熱心とはいえないが休まずに続けている」は16.0%で、合わせると、約45%である。逆に「やったことがない」も31%おり、「やっていたが退部した」の14.3%を合わせるとこれもまた45%を越えている。部活動の二極化がここにみえる。

森田の調査では、「休まず熱心にやっている」は全体の17.6%、「熱心とはいえないが休まずに続けている」は30.2%で、合わせると、約50%である。逆に「やったことがない」は5.6%、「やっていたが退部した」は14.8%である。本調査よりも「やったことがない」生徒が約25%も少ない。14年間にますます部活動離れが進んだといえる。



質問22-2「あなたは今の部活動を無意味に感じたり、苦痛に感じてやめたいと思うことがありますか。」図14に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった(p<.01)。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情のない出席生徒」は、「どちらかといえばそう思う」が有意に少なく(p<.05)、「そうは思わない」が有意に多い(p<.05)。「遅刻早退だけの不登校生徒」は、「どちらかといえばそうは思わない」が有意に多い(p<.05)。「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「そう思

う」が有意に多く (p<.05), 「どちらかといえばそうは思わない」が有意に少ない (p<.05)。

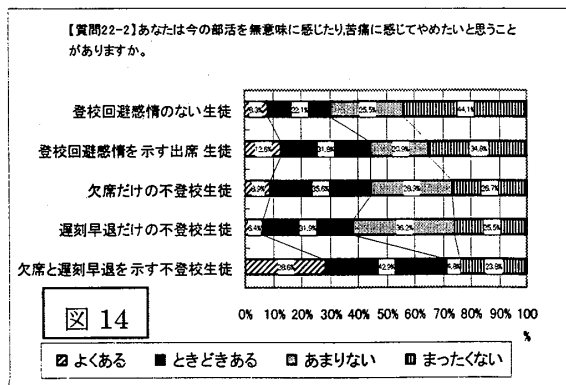
「登校回避感情のない出席生徒」は、部活動に意味を見出している。「遅刻早退だけの不登校生徒」は、遅刻・早退を繰り返しながらも、どちらかといえば部活動に意味を見出している。学校の勉強以外のもの＝部活動に魅力を感じ、欠席に至らずに遅刻・早退ですんでいるともいえるのではないか。「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、部活動をやめたいと思うものが多い。意味を感じていないし、逆に苦痛に感じている。学校生活に意味の持てるものがなにひとつないため、欠席・遅刻・早退を繰り返すのではないだろうか。

全体的な傾向をみると、「よくある」のは全校生徒の11.3%である。「ときどきある」は30%で、合わせると約40%である。

森田の調査では、「よくある」は全体の12.6%、「ときどきある」は29%で、合わせると、約43%である。本調査とあまり変わらない。

しかし、ここでも「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は「よくある」と高い割合 (28.6%) で回答している。今までの質問の結果から推察できるが、部活動をなんのためにしているのか考えさせられる。部活動が今まで述べてきたように生徒を引きつけることができず、無意味さを感じさせるものになっているとすれば、生徒を学校教育に引き止めておくことはできなくなっている。授業や学校行事・部活動など生徒にとって、学校のどこにも引きとめるものがないとなると不登校に陥ることも十分にある。

自主的な活動の場であり、自己実現を図りつつ生徒の資質や能力を伸ばして個性化を図っていく



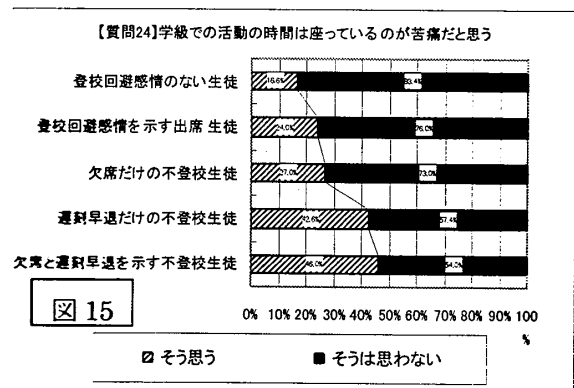
場である部活動に対して、不登校生徒の約半数が苦痛や無意味さを訴えていることは注目すべきことである。

質問24「学級での活動の時間はすわっているのが苦痛だと思う。」図15に結果を示す。χ<sup>2</sup> 検定の結果、人数の偏りは有意であった (p<.01)。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情のない出席生徒」は、「そう思う」が有意に多く、「そう思わない」が有意に少ない (p<.01)。「遅刻早退だけの不登校生徒」・「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「そう思う」が有意に少なく、「そう思わない」が有意に多い (p<.10)。

「登校回避感情のない出席生徒」は、苦痛に思っていないことから、学級に居場所がある。しかし、「遅刻早退だけの不登校生徒」・「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、学級に居場所がないといえる。

森田の調査では、どのタイプも本調査より「そう思う」が10%から20%多い。高校生になると中学生より学校生活経験が長い分人間的に相手を受け入れる幅ができており、相手の立場を多少なりとも考えることができるようになってきたためと考えられる。



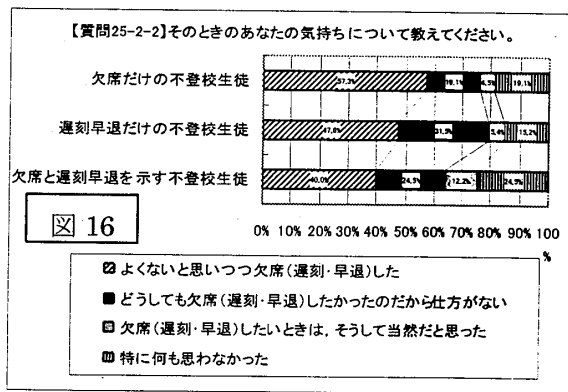
学級での居場所が不登校傾向に大きな影響を与えていると考えられる。

#### 4) ビリーフ

不登校問題においては、規範へのつながりを子どもたちがどのように形成しているかは、問題の現れ方に影響を及ぼす重要な要素である。学校に時間通りに登校し、授業に出席することは、規範を構成する重要な部分であり、いずれの学校で

も、その遵守義務については校則やきまりとして明文化されている。登校や出席に関する道徳的義務感情がゆらぎ始め、休んでも遅刻・早退しても特に罪悪感を持たない生徒が増えてきている(質問25-2-2)。明らかに規範の正当性が基盤を失いつつある。学校を休むことに罪悪感を持たなくなってきたのは、子どもたちだけではなくその親たちにもいえる。例えば、子どもに学校を休ませてみんなで家族旅行に行くなどがあげられる。

「質問25-2-2そのときのあなたの気持ちについて教えてください。」結果を図16に示す。人数の偏りに有意な差はない。どのタイプも「よくない」と思いつつ欠席(遅刻・早退)した」が40%を越えており、欠席・遅刻・早退をよくないこととと思っている。



しかし、「特に何も思わなかった」は、15%以上あり、学校を休むことについて罪悪感を持っていない。学校に行くことに意味を見出していないといえる。

森田の調査では、「特に何も思わなかった」が、全体で26.9%であり、本調査より約10%多い。中学生の方が休むことに対して罪悪感を持っていないことがわかる。

質問27「あなたは校則の中でおかしいと思うものがありますか。」図17に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $p < .01$ )。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情のない出席生徒」は、「たくさんある」( $p < .01$ )「すこしはある」( $p < .05$ )が有意に少なく、「あまりない」・「まったくない」が有意に多い ( $p < .01$ )。「登校回避感情を示す出席

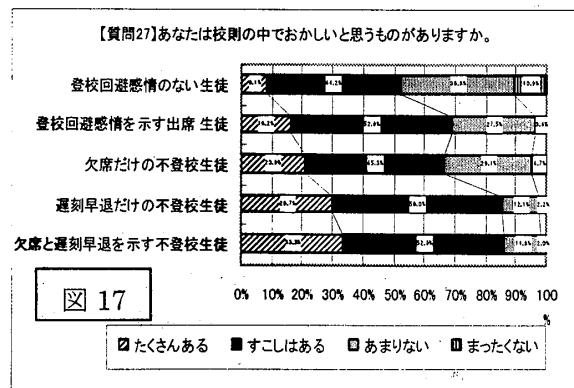
生徒」は、「ときどきある」が有意に多く ( $p < .10$ )、「まったくない」が有意に少ない ( $p < .01$ )。

「遅刻早退だけの不登校生徒」・「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「たくさんある」が有意に多く ( $p < .01$ )、「あまりない」が有意に少ない ( $p < .01$ )。

「登校回避感情を示す出席生徒」は、校則におかしいものがあると感じているものが多い。しかし、感じていながらもまだ学校は必要と考えているので、不登校にまでは至っていない。ソーシャル・ボンド＝「規範へのつながり」がある。「遅刻早退だけの不登校生徒」・「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「たくさんある」・「ときどきある」をあわせると85%を越えている。学校には、彼らを惹きつけるものがもうなく、おかしいと思うばかりなのではないかと考えられる。

森田の調査でも同様である。納得のいかない校則は今も昔も生徒にとってはたくさんあるといえる。また、森田の調査のころから「規範へのつながり＝ピリーフ」が薄れてきたとも考えられる。

質問27「納得のいかない校則」では、不登校群生徒は出席群の生徒に比べて、校則の中に正当性を欠いた納得できないものがあるとする生徒が多い。この質問は校則の具体的な内容にまで立ち入って聞いていないので、不当だとしている校則が出欠に関する規範や遅刻指導などなのか、服装や髪型などその他の領域なのかを決めることはできない。しかし、規範への正当性の欠如と不登校行動は関連があるといえる。また、正直者がばかをみたり、扱いが不公平であったりする状況があれば、規範への正当性は揺らぐことになる。



質問28「あなたは、先生に反発を感じる事が

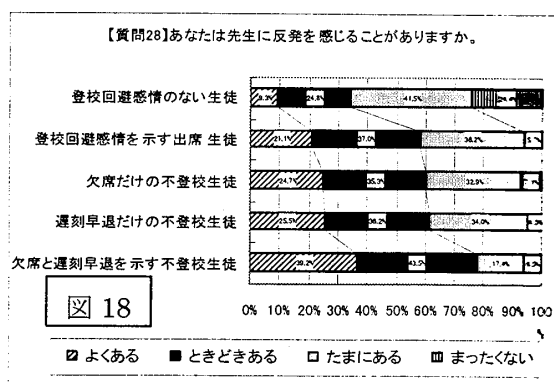
ありますか。」図18に結果を示す。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $p < .01$ )。そこで、残差分析を行った。

「登校回避感情のない出席生徒」は、「よくある」・「ときどきある」( $p < .01$ ) が有意に少なく、「あまりない」( $p < .05$ ) 「まったくない」( $p < .01$ ) が有意に多い。「登校回避感情を示す出席生徒」は、「ときどきある」が有意に多く ( $p < .05$ )、「まったくない」が有意に少ない ( $p < .01$ )。

「遅刻早退だけの不登校生徒」は、「まったくない」が有意に少ない ( $p < .05$ )。「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」は、「たくさんある」が有意に多く ( $p < .01$ )、「あまりない」が有意に少ない ( $p < .01$ )。

「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」が、「よくある」が約40%いる。教師との関係が、不登校の一因となっているといえる。

全体的には、「よくある」・「ときどきある」を合わせると約60%いる。これほど多くの生徒が先生に反発を感じている。不登校の理由の「先生とうまくいかない」・「先生がひどくしかる」が高い数値を示していたことを考えあわせると、教師への反発感情が、不登校発生と密接な関係を持つと考えられる。また、不登校群の生徒は規範への正当性を基礎づける権威の担い手への承認が崩れており、それだけ正当性の信念を媒介とした学校社会とのボンドが形成されていない。



#### IV まとめ

以下、結果と考察以外のところで、全体的に特徴的なことをまとめてみる。

##### (1) 私事化過程の進行について

第一次私事化過程の進行は、質問37の「将来の

好ましいライフスタイル」についての回答に代表された。今の生徒たちは、「お金や名誉より自分の好きなように生きる」が飛びぬけて多く、次に「お金をもうける」であり、「世の中や社会のためにつくすことを第一に考える」は、わずかである。

生徒の意識には、学校社会をとおして全体社会へと寄与するという考えは少なくなってきた。

社会的な献身についての消極的な態度は、好ましいライフスタイルという不確定な要素の入った将来の問題だけでなく、地域への貢献について尋ねた質問でも同じような傾向がみられる。ボランティア活動への参加の呼びかけなどに、仮に時間があっても「参加したくない」と回答した生徒は60%を越えている。

第二次私事化過程の進行は、質問34の「成績と将来の幸せとの関係」についての回答に代表された。出席群と不登校群に差はあるが、学校での成績が将来の幸せを保証するものではないと考える生徒が58%を越えている。「いい成績→いい高校→いい大学→いい会社→幸せな生活」のゆらぎである。学校にもはや価値を見い出せなくなってきた。そのために不登校傾向の生徒が増えるといえる。

確かに現代社会は、かつてないくらいにゆらいでいるといえる。いい会社といわれていた大手企業が倒産したり、リストラが行なわれたりしている。総務省が2004年1月30日発表した「労働力調査」によると、2003年平均の完全失業率は5.3%である。完全失業者数は前年より9万人減って350万人となった。失業率が改善するのは、1990年以來13年ぶりであるが、いまだに350万人の人が失業している。2003年の平均有効求人倍率は0.64倍で就職したくても仕事もない。厚生労働省の調査によるとホームレスは全国で約25000人、理由は会社の倒産・失業・仕事が減った等である。いい大学を出たからいい会社に入ったから安心が買える世の中ではなくなってきた。先の見えない社会が今である。明日何があってもおかしくない時代である。そんな中、生徒たちに何を目指して「勉強しろ」・「いい成績をとれ」・「学校にき

ちんと来い」といえるのだろうか。教師として生徒に何を伝えていけばいいのか現代の教師たちは悩むのではないかと考える。しかし、こういう先の見えない時代だからこそ、学校に来て友だちや先生と話し、さまざまな知識・情報を仕入れることが必要ではないかと考える。人と接することで、いろいろな人がいろいろな考え方をもちいることや自分は自分であっていいことなどを知ることが大切である。たくさんの情報を得、そしてよく考え、自分の道を見い出してほしいと考える。

## (2) ソーシャル・ボンドについて

欠席・遅刻・早退をする不登校生徒たちに対して、登校回避感情を持ちながらも学校に来る生徒たち＝グレイゾーンの生徒たち＝がいる。ややもすればグレイゾーンの生徒たちは、不登校生徒になるかもしれない。グレイゾーンの生徒は、不登校の供給源ともいえる。グレイゾーンの生徒たちを学校につなぎとめているものはソーシャル・ボンドである。

質問14の友だち関係、質問15の先生との関係、質問16の休み時間の過ごし方における友人関係、質問17の一緒にいたい人などの問いから、対人関係のボンド＝アタッチメントのある生徒は不登校になりにくいといえる。また、質問10「学校行事の中で親しくなった友だち」では、どのタイプの生徒も多くの生徒がいると回答している。「欠席と遅刻早退を示す不登校生徒」も60%近い。行事で協力し合うことでアタッチメントが高まると考えられる。

質問5で授業を抜け出したいと思う生徒は多いが、最後の質問2で将来どれくらいまで進学したいかの問いには「大学まで」と不登校群を含む各タイプの多くの生徒が答えている。不登校群の生徒が、進学という目標については、強制であれ、主体的であれ、自分の目標に組み込んでいることがわかる。模範的に制度化された目標行動にコミットメントを持っている。ソーシャル・ボンドの1つであるコミットメント＝手段的自己実現である。生徒が目標を持っていることやその達成に向けて行動していることに充足感をもっているか

が重要になることは確かであるといえる。

質問5 授業を抜け出したい、質問7 学校生活の繰り返しがいや、質問13 学校行事はきゅうくつ、質問14 放課後・休み時間は苦痛、質問22 部活は退部した、質問22-2部活は苦痛、質問24 学級活動は苦痛というように、出席群にもいるが不登校群の生徒はこの割合が一段と高い。学校社会の中にインボルブメント＝この即時達成的な自己実現を充足させる機能をいかにして埋め込み子どもたちの動機づけを確保して無気力や学習意欲の喪失を防ぐとともに、逸脱への圧力を低下させるかは、重要な課題であるといえる。子どもたちにとって学校へ登校し、学校生活に参加するに足る意味をいかにして見つけ出させ、いかにして伸びやかないきいきとした空間にするかという作業であるといえる。

規範へのつながり＝ビリーフとは、法律や校則が正当なものであるという信念を内容としている。

質問27 納得のいかない校則についてみると、不登校群生徒は出席群の生徒に比べて、校則の中に正当性を欠いた納得できないものがあるとする生徒を多く含んでいる。質問28 教師に反発についてみると、不登校群の生徒は、規範への正当性を基礎づける権威の担い手への承認が崩れており、それだけ正当性の信念を媒介とした学校社会とのボンドが形成されていないといえる。

ボンド理論は、4つの要素を束ねた学校社会と子どもたちの間にあるつながりの糸の太さをボンドの強弱とし、その束ねられた糸が細くなることによって不登校現象の発生を説明している。

私事化現象は、献身価値を低下させ、ボンドを希薄化させる。しかし、充足価値の肥大化に即応して新たな意味の探求領域を見い出すことによってボンドを強める方向にも作用する。

不登校現象をボンドの枠組みで解釈すれば、子どもたちが学校社会へのつながりを弱めていこうとする傾向と、親や教師が子どもたちを学校や教育へとつなぎとめようとする圧力の「綱引き」の中で発生している。あるいは、子どもたちが学校社会へとつながっていこうとする傾向と、学校社会から疎外されていく傾向との「綱引き」の中で発生

しているといえる。

綱引きが生じるのは、不登校群、出席群を含めた多くの生徒たちと学校社会とのつながりの糸が細く弱くなっているためである。しかも綱引きによってますますつながりを弱めている。つながりの糸は細くなれば細くなるほどわずかなきっかけで切れることになる。現代の不登校問題の裾野が広いのは、このような子どもたちと学校社会とのつながりのもろさを共通の背景としているからである。

以上、高校生の不登校傾向についてみてきた。

仮説1の「生徒が変わった」、「以前と違う」という見方はプライバタイゼーション（私事化）の進行によるものと説明できる。

仮説2の登校回避感情を持ちながらも、不登校に陥らないグレイゾーンの生徒たちを学校につなぎとめているのは、ソーシャル・ボンドであることが説明できる。

これらの結果を踏まえ、生徒のために学校は何をしなければならぬのかを考えてみたい。

## V 今後の課題

子どもたちは、さまざまな思いを抱えながら、学校に通っている。教師はそのことを常に心に留めておく必要があると思う。核家族化、少子化、情報化など以前と社会は違ってきている。その中で子どものおかれている環境も違ってくるのは当然であり、子どもが変わるのも当然である。しかし、学校や教師は変わらない。変わらないからこそ、変わっていく子どもたちとの軋轢を生む。教師は、今までの指導法・対処法に固執せず、今の子どもにあった方法を取り入れていかなければならないと切に感じる。

(1) 意識調査を通して、生徒の今現在の心の状態を知る。年に1回だけでなく、学期ごと・節目ごとにとることで、生徒の心の変化に気付き対応する。

そのためには、アンケートなどの調査の結果の迅速な処理と分析が必要になる。迅速な処理・分析のために外部に処理を頼むなどの予算の確保が必要になる。

校内でおこなうときは、情報処理に長けた教師

にプログラムなどを組んでもらい、集計することも考える。しかし、入力等は担任や副担任がすることになるので、入力方法も簡単なものが必要になる。係がまとめて結果を集計・分析することになるので、負担が大きくなる可能性もある。各係の協力と職員の共通理解が必要である。

(2) アンケートなど調査の結果を生徒にフィードバックする。

そのためには、教育相談期間を設定し、生徒一人一人と会話し、話題にする時間を設けることが必要である。

今現在も教育相談期間を設け実施しているが、時間設定が非常に厳しい・一人一人にかかる時間が十分でない・全校一斉で行なうため場所の設定が難しい・同じ職員室のあちらこちらでの相談は他の人に聞こえるのではないかなど心配があり、込み入った話がしにくい・進路指導や一方的な教師の指導になりがちである等の反省が挙がってきている。

教育相談の必要性を教師一人一人が十分共通理解する必要がある。

(3) 教師に対する研修会等を実施する。

その目的・内容については以下のものが考えられる。①教育相談の必要性やあり方についての共通理解を深める、②カウンセリングの基礎について知る機会をとる、③生徒への関わり方について考える、④授業にいかすカウンセリング<sup>注3</sup>について知る、⑤事例研究会を持ちさまざまな事例に触れる、また自分の指導の癖などに気づく機会にする、⑥教師自身の課題や悩みを解決したり、相談したりする場とするなどがある。

しかし現状では、時間設定が難しく短い時間しかとることができないために講話だけで終わってしまったり、出張等で職員側の参加者が少なかったりする。学校の各係で連絡を取り合い、少しでも多くの教師が参加できるように、また充実した時間が取れるように工夫していく必要がある。

(4) 生徒の実態を知り、教師自身も変わる必要のあるところは変える努力をする。



学校に行きたくない一番多い理由は「勉強をしたくない」であり、次に「授業がわからない」である。なぜしたくないのか・わからないのかを考える必要がある。確かに高等学校になると授業の進度が速くなり内容も濃くなる。しかし、生徒がわからないままでは授業の意味がないのではないか。「わかる授業」<sup>注4</sup>をする必要がある。

研修会等を通して、教師が自分自身を見つめる機会をとることが大切である。

また、教師は、社会の流れから「よい成績→よい大学→いい会社→社会性の向上→幸福な生活」という「人生のチェーン連鎖神話」が揺らいでいることを自覚する。

よい大学に入るためだけの勉強ではなく、生徒自身の目的にあった勉強の必要性や方法を指導する必要がある。子どもたちは自分に必要なものには敏感である。従来の教え方（たとえば一斉授業で大学受験のための勉強）では難しくなっている。

(5) アタッチメントを高めるために、友だち・教師とコミュニケーションをとる機会をたくさんつくる。

学校にいきたくない理由の「友だちとうまくいかない」のなかには、さまざまな友人関係上の悩みがこめられている。友人との葛藤・対立だけでなく、関係性がうまくとれないことへの悩みもあると考える。そのためには、コミュニケーション・スキルを育てる。2004年4月から独立教科「コミュニケーション」をスタートさせた公立高校がある。コミュニケーションこそは生徒たちがよりよく生きるための力となるものであり、そのスキルの習得を学校教育の中でサポートしたいという姿勢がある<sup>注5</sup>。具体的には次のものが挙げられる。

1) 構成的グループエンカウンター<sup>注6</sup>を取り入れる。構成的グループエンカウンターは、ふれあい(リレーション)体験と自己発見をねらいとしている。ふれあいとはホンネとホンネの交流(感情交流)のことであり、自分のホンネに気づく、気づいたホンネを表現・主張する、他者のホンネを受け入れるということである。自己発見と

は自己盲点に気づき、それを克服すること。自己盲点とは、まわりの人々は気づいているが自分は気づいていない自分自身。自己盲点の克服とは、周囲の人々や自分自身も気づいている領域を広げることである。

2) ピアサポート<sup>注7</sup>を取り入れる。ピアサポートとは生徒たちがかかえる諸問題に対して、仲間の生徒が相談相手になり、支えていく活動である。ピア(Peer)は仲間、サポート(Support)は支援することで、困っている仲間を支援する技法を学んだサポーターの生徒が相談にのり、一緒に問題の解決をはかろうという活動のことである。

3) アサーション・トレーニング<sup>注8</sup>を取り入れる。アサーション・トレーニングとは「自己否定的な認知のため自己表現がうまく出来ない人」や、逆に「自己主張が強すぎて相手を押し込んでしまうような言動をする人」へ行う、自分も相手も大切に自己表現の訓練手法のことである。ロールプレイ等を通して練習する。

(7) さまざまな問題を抱えた生徒に援助する方法として「援助チーム<sup>注9</sup>」を組むことが挙げられる。ある生徒に対して一緒に援助を行う人たちのあつまりを援助チームという。担任、保護者、コーディネーター役の教育相談係などで構成される少人数のチームである。

組む理由として、①子どもを効果的に援助するには、援助者ひとりの持っている情報だけではじゅうぶんではない、②援助者がひとりでおこなえる援助にはかぎりがある、③援助者がそれぞれの方針で子どもにかかわることは、子どもをさらに混乱させる危険性があるからである。

チーム援助の機能として、①複数の援助者がそれぞれの専門性と立場を生かして、子どもを総合的に理解する、②複数の援助者がそれぞれの専門性と立場を生かして、子どもを効果的に援助する、③教師が学校で子どもを効果的に援助する案を具体的に提供し、その実践を援助する、④保護者が家庭で子どもを効果的に援助する案を具体的に提供し、その実践を援助する、⑤担任や保護者など、中心となる援助者を情緒的に支える、⑥教

師、保護者、スクールカウンセラーなど援助者の援助力を高めるなどがある。

(8) 教師をサポートするための会をもつ。

教師自身の課題や悩みを解決したり、相談したりする場の設定をする。悩みを抱える教師が1人だけで悩み苦しむのではなく、お互いに悩みを打ち明けたり、話したりする中で気持ちを軽くしていける場になる。話すことで自分では気づかなかったことに気づいたり、新たな発見やヒントをつかんだりする機会にする。

(9) 学校が一体となって教育相談や生徒指導に取り組んでいる事例について文献を収集して参考にする。

例えば、学校として一丸となって不登校に取り組んだ高等学校に北星学園余市高校（北海道余市町）がある。男女約370人の生徒の4割近くが別の高校の中退者である。北海道以外の出身も6割を占める。経営難の北星が中退者の受け入れに踏み切った88年当時は、ツッパリ系が主流だった。最近是不登校・ひきこもり経験者の方が多い。不登校・ひきこもりの経験者が生徒の6割を超える。保健室は職員室の一角にある。そこに来る不登校気味の生徒を養護教員だけに任せず、教員全員で目配りするためである。下宿の部屋にひきこもる生徒もいる。教室でさわぐ仲間の輪に入れず、後ろでじっと立っている生徒もいる。「学校で居場所を見つけられれば、だれでも伸びていくんだが……」と校長はいう（2003年7月毎日新聞）。不登校への取り組みは、参考にすべき点は多いのではないと思われる。

### 〇おわりに

不登校は子どもが現在の学校教育に対して発している警鐘だと考えられる。

竹内（1998年）は、「いますぐれた教育実践をやっている教師」の特徴を次のように描いている。「子どもたちを人格的な存在として尊敬し、一定の距離をもって語りかけ」、「子どもと親しくなりすぎることもないと同時に、すぐに子どもを怒鳴りつけるということもない」、「また子どもの

内面にズカズカと立ち入ることもしませんが、だからといって子どもに対して疎遠でもない」、「程よい距離を子どもとの間にもっている」。子どもの思春期の心理特性とそれに関わるものの態度が述べられている。教師の側の対応一つで生徒との関係は、深くもなり、切れてもしまう。忙しい教師に常に心のゆとりを持って生徒と対応しろというのは難しいかもしれない。しかし、子どもの思春期の心理特性や「待つ」ことの大切さなどを心に留めて生徒と接することは生徒・教師双方にとってプラスとなると考える。

学校全体としては、職員の共通理解を図り、生徒にあたることが大切である。生徒の実態を十分把握し、対応することが大切である。「一丸となって」は、教師それぞれの意見もあるので難しいと思うが、学校としてやると決めたことはそれにのっとった指導が望まれる。また、不登校問題にあたっては、担任教師は1人で抱え込むのではなく、チームで取り組むことが望まれる。その体制づくりも必要である。また、チーム・ティーチングや分割授業などを取り入れ、理解の不十分な子どもたちへの援助を考えることも大切であると考える。

学校全体を通して、生徒に対する意識を変えることやカウンセリングについて知る場をいかに設けるかが課題である。係を中心に日々学校現場へ提案し続けなければならない。また、機会を捉えて、さまざまなことを紹介していかなければならない。

---

### 【脚注】

- 1 平成15年度学校基本調査速報 文部科学省
- 2 森田洋司『不登校現象の社会学』学文社、1991年  
※森田の調査は1989年実施、全国都市域に住む中学2年生を対象としているという違いはあるが、この調査をベースに実施した。
- 3 國分康孝編著『学校カウンセリング』日本評論社 1999年  
諸富祥彦『学校現場で使えるカウンセリング・テクニック上下』誠信書房 1999年

- 4 わかる授業：文部科学省初等中等教育局教育課程課教育課程企画室『[確かな学力]を育む[わかる授業]の創意工夫例』2002年
- 5 鳴門教育大三宮真智子『児童心理』2004年7月号金子書房
- 6 國分康孝, 1974年に提唱『エンカウンター』誠信書房 1981年
- 7 日本教育カウンセラー協会認定ピアヘルパー資格：「ピアヘルパー」は、学生を対象
- 8 平木典子『アサーション・トレーニング-さわやかな(自己表現)のために』日本・精神技術研究所 1993年
- 9 石隈利紀・田村節子『チーム援助入門』図書文化 1993年

#### ○謝辞

最後に、本研究の調査・分析にあたって、多くのご指導やご協力をいただいたすべての方々に心より感謝いたします。

特に調査の実施にあたっては、該当高等学校の校長先生をはじめとする多くの先生方や係の先生・生徒さんたちには、多忙な中に快くまた惜しみないご協力をいただき本当に感謝いたします。

#### 【引用・参考文献】

- \* 森田洋司『「不登校」現象の社会学』学文社 1991年
- \* 清原浩「不登校・登校拒否に関する研究の系譜」障害者問題研究69 1992年
- \* 佐藤修策『登校拒否ノート』北大路書房 1996年
- \* 内山喜久雄編『登校拒否』金剛出版 1983年
- \* 森田洋司・松浦善満編著『教室からみた不登校』東洋館出版社 1991年
- \* 森田洋司『不登校その後』教育開発研究所, 2003年
- \* 竹内常一『子どもの自分くずしと自分づくり』東京大学出版会 1987年
- \* 竹内常一『少年期不在 子どものからだの声をきく』青木書店 1998年
- \* 佐々木賢『怠学の研究』三一書房 1991年
- \* 渡辺位『不登校のころ』教育史料出版会

1992年

- \* 渡辺位『子どもはなぜ学校に行くのか』教育史料出版会 1996年
- \* 竹内常一『学校ってなあに』青木書店 1993年
- \* 保坂亨『学校を欠席する子どもたち』東京大学出版会 2000年
- \* 石隈利紀『学校心理学』誠信書房 1999年
- \* 田中敏・山際勇一郎編著『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版 1989年
- \* 田中敏『実践心理データ解析』新曜社 1996年
- \* 宮脇典彦ら共著『SPSSによるデータ解析の基礎』培風館 2000年
- \* 中本新一『ザ・教育困難校』三一書房 1995年
- \* 文部科学省 不登校問題に関する調査研究協力者会議「今後の不登校への対応のあり方について(中間まとめ)」2003年
- \* 文部科学省 不登校問題に関する調査研究協力者会議「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」2003年
- \* 文部科学省 平成14年度の生徒指導上の諸問題の現状について(速報) 2003年
- \* 鹿児島県教育委員会「かごしまの教育21」12月号 2003年
- \* NHK放送文化研究所編「NHK中学生・高校生の生活と意識調査-楽しい今と不確かな未来」NHK出版 2003年